

江戸 7月

今月の江戸しぐさ「かえる」

江戸しぐさでは「犬」は、犬喰い、「むくどり」は、自分さえよければよい人達という、動物に例える例がいくつかあります。

「かえる」は実際はどうかわかりませんが、江戸時代の人には前しか見えない動物と考えられていたようです。

このことから、いましめとして、視野に入らないところにも意識を及ぼせること、周囲の状況をよく感じること、視野狭窄にはなつてはいけないことを教えています。

時々レジで、後ろに沢山並んでいるにもかかわらず、たまつた小銭を使つてしまおうとのろのろと時間をかけてお金を払つたり、携帯を操作しながら歩いたり、周りの状況が認識できない、しようとしなない、自己中心的な野暮な人がいます。スマートで粋が大事な価値観であつた江戸時代では下品（げぼん）として大変嫌われた行為です。

職場では、自分の仕事だけではなく周りの状況も感じるようにしてください。忙しそうにしている同僚がいたら、「これやりましょうか」ではなく「忙しそうだったからこれやつといたよ」だつたら粋ですね。

また、医療は人をみるものです。一つのデータ、所見に気を取られ、患者全体が発つしている情報を見逃さないようにしましょう。

（自戒をもつて記しています）



赤い暖簾(のれん)

※江戸思草は、江戸時代の町民が良いとされること、悪いとされることなどの生活の規範としていたものです。

判断の基準は粋かどうかだつたようです。

粋の概念は武士の武士道に対抗するものだつたという説があります。他の国にない、一般庶民の高度な精神性が、当時日本に来た外国人に驚きをあたえていたことが多数記録されています。

ヘレン・ハイド

Helen Hyde(1868~1919)

日本を愛したアメリカ人版画家。
江戸の風情が強く残っていた明治期に10年以上滞在し、女性の視点から愛らしい子供の作品をたくさん残してくれました。

当時の外国の観察者の多くが、西洋諸国と子供の様子や子育ての考え方が根本的に異なっていることに驚いていました。

